

---

# られんたいんの妖精

りきてっくす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

られんたいんの妖精

### 【Zコード】

Z6797J

### 【作者名】

つきてつくて

### 【あらすじ】

いつの間にか私たちは忘れてしまっていよいよです。子どものころには妖精の姿が見えていたことを……。原因不明の高熱にうなされる幼い息子をすくうため、私と妖精たちは夢の世界へ飛び込んだのでした。まあ冒険のはじまりです。（絵師であるMポムさんに捧げる作品です）

## OVERTURE

この小説を、絵師のMポムさんに捧げます

だれもが大人になるにつれ、忘れてしまうようです。  
子どものころには、じくふつうに妖精のすがたが見えていたことを……。

そう、彼らはたとえばテレビや冷蔵庫がいつもそこにあるように、当たり前のものとして私たちのありふれた日常のなかへとけ込んでいました。

あるときは、早春の庭先でクロッカスの黄色い花に顔をうずめて蜜をすすつていたり、またあるときには、夏祭りの夜店で買つてもらつた金魚鉢によりかかつて読書していたり、あるいは、暮秋の日差しに温められたトタン屋根に丸くなつて気持ち良さそうに昼寝していたり、また冬になれば、重たい雪をのせる松の枝先にちょこんと乗つて、勢い良く飛び跳ねては雪しずりの音を競いあつたり……。そんな彼らのすがたを、子どものころの私は当然のものとして認識し、そしてまわりにいる大人たちにも同じように見えていたのだと信じて疑わなかつたのです。

あの愛らしい妖精たちが、私の前から姿を消したのはいつのころでしようか。

いよいよ、彼らが消えたんじゃなくって、私のほうが妖精を見ることができない日を、純粹な心を失つてしまつただけなのかもしません。とにかく、結婚してママとなつた今では、もう庭先で跳ね回る彼らの姿を見ることはなくなつてしまつたけれど、いえ妖精なんてものが本当に存在することじたいすっかり忘れているのだけれど、でも家事や育児でへとへとになつて深い眠りにおちた深夜、彼らはときどき夢の中に現れては、その小さな手で私の髪をつんづん引つぱつぱつ囁くのでした。

「ねえねえ、遊ぼうよ。昔みたいに、みんなで遊ぼ。鎮守の杜へ行ってかくれんぼしよう。公園の砂場でお城をつくって遊ぼうよ。教会の庭で摘んできたサルビアの花を、とつきび畠の案山子の頭に挿してやつたらきっと可愛いよ。むかしはよくそりやつて遊んだじゃない。今だって君、ホントは遊びたくってウズウズしてるんだ。だからさあ、またみんなで一緒に遊ぼう。……それともあれ？ もうボクたちのことなんか忘れちゃつたってわけ？」

そう問い合わせられたとたん、私はいつも、慌ただしい日常に流れつい心のすみに追いやつてしまつたあの懐かしい記憶をよみがえらせ、胸を熱くするのです。そう、すっかり忘れていたようでいて、じつは心のどこかでちゃんと覚えていたのでした。少女時代、いつも当たり前のように見て、聞いて、触っていた、あの甘ったるいような非現実感をともなう無垢で、そして驚きにみちた世界のことを。妖精たちは、私の無意識のなかに今もしつかりと息づいていたのです。

夢の世界で、私はたちまち少女の姿に戻り、彼らに向かつて微笑みかけるのでした。

「嬉しいなあ、また君たちと会えたよ」

すると妖精たちも嬉しそう羽をぱたぱたさせて、私を取り囲みます。

「なに言つてるんだよ、君が気づいてないだけで、僕らはつねに君のそばにいるんだから」

「それ本当？」

「ああ、本当だ」

その言葉に、私はまた胸を熱くするのです。

私といつも一緒に遊んでいた妖精は、三人いました。いやこの場合、三匹と言つたほうが正しいのでしょうか……？

私の目の前で腕組みしている生意気な子がマーク、すみれ色の髪にいつもターバンを巻きつけています。なにか嬉しいことがあると、その笑顔につられるみたいに背中の羽がぱたぱたと動きます。ウス

バカゲロウのように、やわらかくて透き通つた羽です。

その隣でもじもじしている、ちょっとびり太つた子はイルル。サワークリームみたいな白い顔にはそばかすが浮いています。彼の羽はマークのものとは違い、オーヤンマのように大きくて立派です。その羽が太陽の光を受けると、まるでステンドグラスのように七色に輝くのです。

そして一人の頭上にふんわり浮かんだまま頬杖ついてる女の子はシャニース。ローラーカナリアみたいなオレンジ色の巻き髪を肩にたらし、ひまわりの花びらでつくつたフリルつきのワンピースを着ています。彼女の羽はアゲハチョウのように優雅で、そしていつもそのゴージャスな羽をゆっくりはばたかせては、金色の鱗粉をきらきら舞い上がらせているのです。

夢の中で彼らに会つとき、私はいつも子どものころ暮らしていた田舎町の一軒家に来ています。そこには広い庭があつて、季節の草花が生い茂つています。垣根の向こうはトウモロコシ畑でした。どこまでもつづく縁とその合間に見え隠れする花穂が視界一杯に広がつて私の田をうばいます。懐かしい景色に見とれていると、妖精たちはすぐにそんな私をうながして素敵な場所へと案内してくれるのでした。

そこへ行くには、まず自分の背たけよりも高いトウモロコシ畑の迷路を抜けなければなりません。それからアシの生いしげる草原を突つ切り、オタマジヤクシの小川を飛びこえて、その先にあるブナの林へと分け入るのです。湿つた土を踏みしめ、どこまでもつづく木の下闇を抜けるとやがて視界が開け、私たちしか知らない秘密の花園がその姿を現します。一面にラズベリーと野バラが咲きみだれ、瑠璃色の糸とんぼが頭の上をかすめる素敵な場所です。そこで私と妖精たちは、いつも日が傾くまで遊ぶのでした。

おにじっこ、かくれんぼ、だるまさんがころんだ……。ときどきマークとシャニースが喧嘩して、それを私とイルルで仲裁します。楽しくて、思わず時の経つのを忘れてしまいます。でも、どんなに楽

しかも、やがて家に帰る時間はやってきます。そのとたん、私はいつの間にか大人の姿に戻つていて、申しわけなさそうに彼らに言うのです。

「「ごめんね、私もお家に帰らなくっちゃ……今日は楽しかったよ」とすると妖精たちは、その可愛らしい手で私の服に取り付いて、口々につたえます。

「やだよ、もつと遊ぼうよ。」うちの世界で僕らと一緒に暮らそう。そうすればいつまでも遊べるじゃないか」

「そうはいかないわ」

「どうして?」

「だって……、私はもう大人だから」

私がうつむいてそう言つと、妖精たちは朝露のように透きとおつた涙をこぼして泣くのです。

「どうして、どうして僕たちのことをおいて、一人で大人になっちゃつたの?」

私も一緒に泣いてしまいます。

「ごめんね」

「ねえ、どうして?」

「ごめんね」

「どうしてなの?」

「ほんとに、ごめんね……」

そこで、いつも夢から覚めるのです。

目覚めると同時に、私はいつも夢を見ていたことをえ忘れていました。もちろん妖精たちのことも……。でもそつと頬にふれてみると涙で濡れているし、とても切ない余韻が胸のなかで渦巻いているので不思議でたまりません。自分はなぜ泣いていたのだろう? その理由が分からなくて、私はさらに悲しい気持ちになるのです。なにか大切なものを……、決してなくしてはいけないものをどこかへ置き忘れててしまったような……。

しかしそんな思いにからなながらも、私は追い立てられるように

また慌ただしい日常の中へと飲み込まれてゆくのでした。

現実の世界ではすっかり妖精たちの存在など忘れている私ですが、でもけつして寂しくなんかないません。

なぜなら妖精のかわりに天使がいるからです。

天使は、今も絨毯の上で大の字になつて幸せそうに寝息をたてています。

今年で五歳になる優希です。

まるで女の子のように可愛い顔をしていますが、じつは元気いっぱいの男の子です。柔らかい髪の毛が日の光をあびると金色に輝いて、まるで天使の輪のようになるのです。

私は、この愛らしい天使にいつも癒されています。

今日も、家事のあいまにクッキーをかじりながら一休みしていると、いつのまにか彼がやってきて私の背中をわしわしと上りはじめます。そして小さな手で後ろから首に抱きついて、肩の上にあごをちょっと乗せるのです。

「ねえママ、られんたいんつてなあに？」

優希が訊きます。

「え？」

ちょうどテレビからは、バレンタインティーに向けたチョコレートギフトのコマーシャルが流れています。私は、ついくすりと笑ってしまいます。

「それはね、大好きな人にチョコレートをあげる日よ」

すると優希は目を丸くして「おお」と歓声をあげます。

「だいすきなひと？」

「そうよ、大好きな人に、好きです、つて伝えながらあげるの」  
さすがに恋人とは言えません。だって優希はまだほんの子どもなのですから。でも彼は「うん」と力強くうなづくと私の背から飛び降り、ぱたたたと自分の部屋のほうへ駆けてゆきました。私はまた笑ってしまいます。なぜって、優希はきっとなにか勘違いしている

るに違いないのです。母親である私にはちゃんと分ります。そして  
ちょっとずつ期待もしています。あの子はいつも、元気いっぱいに勘  
違いしては私を楽しませてくれるのです。

優希が高熱を出したのは、翌朝のことでした。

いつもはお医者さんに注射をうたれると大声で泣きだす子が、まるでお人形のようにぐつたりしているので私は心配でたまりませんでした。病院から戻り、処方されたお薬を飲ませるといったん熱はひきましたが、夜になってまた四十度近い熱を出し、夫と二人であわてて救急車を呼びました。すぐに優希は入院することとなり、翌日たいせつな仕事があるという夫を家に帰し、私は着のみ着のままで病院へ泊まり込むことになりました。

お医者さんは、いまひとつ原因がはつきりしないと首をかしげています。私はもう心細くてつい泣き出しそうになるのをぐつとこらえていました。やがて一通りの検査を終え、小児用病棟の個室へ移つてからも私は心配で心配で、もう胸が張り裂けそうな思いでした。優希の眠るベッドの横で冷たいパイプ椅子に腰掛けながら、私はうなだれていきました。涙がぽろぽろと頬を伝うのを止められません。

昨日はあんなに元気に駆け回っていたのに……。

小さな小さな腕に点滴の針をさし、ときおり苦しそうに寝息をたててている我が子のひたいに何度も手をかざしながら、私は知つてゐるかぎりの神様に祈りました。

どうか優希を……私の天使をお助けください。

やがて夜は更けてゆき、私は知らず知らずのうちに、じくじく、こくじと眠り込んでいたのでした。

次話へつづく。

「おーい、起きろ！」

混沌とした闇の奥から、だれかが私のこと呼んでいるのです。とても可愛らしい声。鳥の声に似ているでしょうか？もしさうならきつと極楽鳥みたいな全身虹色の羽をまとった美しい鳥に違ありません。どこか遠い異国のエキゾチックな宮殿に独りぼっちで暮らすお姫様が、淋しさを紛らわすために飼っている、お喋りな鳥……。

「もう、起きろってばあ！」

「うるさいなあ、鳥のぶんざいで……。私の幸せな眠りを妨げないでくれる？それに、どうでもいいけど髪の毛をつんつん引っぱるのはやめて！」

半醒半睡の心地よい眠りを邪魔されて、私はちゅうとだけ不機嫌になりました。

うたた寝をするって気持ちいいのです。もつべッドに入つて本格的に寝るより断然気持ちがいい。熟睡するかしないかの、ぎりぎりの境い目に身を置く心地よさ。例えるなら、寒い冬の日に露天風呂に浸かって、そろそろ上がるうか、それとも今しばらくお湯に浸かって温まつていようか、なんてぐずぐず迷つてているときの、あの時聞さえ止まつてしまふような幸福感。いろいろ身も心もトロトロにとろけてしまふような幸せなひとときって、できれば邪魔してほしくないものです……。

「だれが鳥なんだよー。えーい、起きろ、ばか！」

「きやあ！」

小さな手でほっぺたをぴしゃりと叩かれ、私は驚いてがばつと跳ね起きました。田の前では妖精のマークがふんと鼻息を荒げています。相変わらずのやんちゃ坊主です。そのとなりでは、イルルが心配そうな顔つきで田をしょぼしょぼさせていました。

「　　」

「やつと田を覚ましたわ」

「やつと田を覚ましたわ」

「やつと田を覚ましたわ」

私は、まだほんやりしていいる意識を覚醒させるべく、ゆっくりと  
あたりを見回してみました。そこは、子どものころに暮らしていた  
田舎町の一軒家です。どうやら季節は夏のようで、庭の大きな花壇  
には、私の背丈と同じくらい立派なひまわりがいくつも大輪の花を  
咲かせていました。クマンバチが一匹、その周りを元気よく飛び回  
っています。空を見上げると、日に焼けた風のにおいがしました。  
その風に乗って遠くの山や森から、　　とばかりに鳴くセミの声  
が運ばれます。

ふと自分の格好に目を向けると、私はいつものように少女の姿へ  
ともどりていました。小さじこころお氣に入りだつた、ブルーデニム  
のサロペットパンツをはいています。サスペンダーで肩から吊るや  
つです。胸当ての部分には大きなポケットがあつて、そこにはいつ  
も、ママからもらつたレースのハンカチと、ヨーグルト味のキャン  
ディと、そして虫めがねが入れてあります。

私はようやく、自分が夢の世界で妖精たちに会つてているんだと氣  
づき、こみ上げてくる嬉しさに田を細めたのでした。

「やあ、みんなー。また会えたね」

するとマークが、腕組みしながらあきれた顔で言うのです。

「なにが、また会えたね、だよ。つぐづく君つてやつは、のんきな  
子だなあ……」

「え、どうして？」

「だつてさあ、今はたいへんなときなんだろ？」

たいへん？…………たいへん、たいへん、たいへん、  
たいへん、…………たいへん、たいへん、たいへん、  
あつ！

私は、甘い夢の世界から一気に現実へと引き戻され、胸の奥にぽ  
つかり穴があいたような虚脱感におそわれました。そうです、今は  
息子の優希がたいへんなときなのです。みるみるうちに私の口がく

しゃつとへの字になり、涙が込み上げてきます。マークとイルルがあわてて両手を大きく振りました。

「あわわ、泣かないでよ、泣いちゃダメだつてば」

「だつてだつて、優希が……、私の可愛い天使が手のひらで涙をぬぐつていると、マークが私の顔を覗き込んで羽をぱたぱた動かします。

「じつは、そのことで君に話があるんだ」

「……え？」

驚いて目をみはる私の前で、マークがなにやら真剣な顔でイルルに目配せしました。

「おいイルル、昨日の晩のこと話してやれよ」

「うん」

イルルが、そばかすの浮いた顔を固くして私を見つめます。彼の目は、採れたてのぶどうの粒みたいに濃い紫色をしています。その目が困惑のためか、ゆらゆら揺れ動いていました。

「あのね、じつは昨日の夜のことなんだけど、僕、寝ている優希君にこっそり会いにいったんだ」

「優希に……？」

「うん、一緒に遊ぶ約束してたから」

「……」

「なぞなぞ勝負さ。今のところ僕の五勝三敗で、優希君、今度こそ僕のことを負かすつてはりきつていたんだ」

初耳です。優希も妖精たちと遊んでいたんだなって。

「あーつ、じゃあときどき優希が、朝起きてからも眠そうに目をこすっているのは、あんたたちのせいだったのね！」

マークとイルルが頬を赤らめ、えへへと頭をかきます。シャニスが、ふわりと私の肩に舞い降りて「まあまあ」となだめてくれました。

でも考えてみれば私だって子どものころは、ごくふつうに妖精たちと戯れていたわけだし、意外と私たち大人が気づかないだけで、

どこの家庭でも同じように子どもたちは妖精と友だちになり、部屋の中で、庭先で、あるいは妖精たちしか知らない秘密の場所で樂しく遊んでいるのかもしれません。

「でね……」「

イルルが再び真剣な顔に戻ります。私は、黙つて彼の話を聞くことにしました。

「いつものように優希君のいる子供部屋へ忍び込もうと、出窓の外にそつと降り立つたんだ……そしたらさ、部屋の中に誰か、僕より先に来ているやつがいたんだよね……」

「だれ？ 君たちと同じ妖精？」

「それが、ふつうの妖精とはちょっと違うんだな……。まあ、部屋の中が暗くってはつきりとは見えなかつたんだけど」「違つて、どんなふうに？」

「あのね……」

イルルが生睡を飲み込んで、両手をぎゅっと握りしめました。私も、知らず知らずのうちに身を乗り出しています。

「下半身がね、山羊みたいだつたの」

「へ？」

「あれは、きっと……」

言いよどむイルルに代わつて、マークが言いました。

「間違いないよ。パンのやうさ

」

私は心臓が止まりそうになりました。

パンは妖精界の嫌われ者です。なぜつて、いたずらがあまりにも度を越しているから……。

ふつう、妖精というものはみないたずら好きですが、人を傷つけたり、ましてや生命を奪うほどの悪さはしません。でもパンという名前のその妖精だけは違つていました。彼は葦笛を吹くのが得意で、その音色で子どもたちを夢の世界へと誘い込んでは、迷いの森へ置き去りにして楽しんでいます。迷子になつた子どもたちは、泣きながら出口を探しつづけ、やがて疲れ果て死んでしまうと言われ

ています。夢の中で死んだ子どもは、現実の世界でも生きてはいません。よく小さな子どもが原因不明の病氣で亡くなるのは、もしかすると彼のいたずらが元凶なのかもしれないのです。

ああ、どうしよう……優希が、私の大切な子どもが。

なんだか息が苦しくなり、私は手のひらで胸を押さえたまましゃがみこんでしまいました。ショックと心細さで泣きだしそうです。今ごろ暗い森の奥では、優希があてもなくさよないながら泣いているのでしょうか。ママー、ママー、と泣き叫びながら私のことを呼んでいるのでしょうか。そう思つと胸がはりたけそうでたまりません。私はいつたいどうしたら……。

するとマークが、力強い声で言いました。

「だいじょうぶだつてば、君には僕たちがついているんだからさ」につこり微笑んで自分の胸をぽんと叩くのです。イルルも、うんと大きくなずいてくれました。シャニスが私の肩からひらりと飛びたち、田の前で大きく両手をひろげてみせます。

「だからね、これからみんなで迷いの森へ優希君を探しに行きまして相談してたところの」「え……、でもどうやつて？」

「あなた優希君のお母さんでしょ？ だつたら簡単よ」

ふふと微笑むと、彼女はフィギュアスケートの選手みたいに、くるりんと回つてみせました。

「ここはあなたの夢の世界。そして母親の夢はね、どこかで子どもの夢とつながつているものなのよ」

「それ、ほんと？」

「ええ、本当。だからあたしたちについてきて。優希君の夢の世界へ案内してあげる」

そうです。彼らは今夜、不意に襲つてきた災難から私たち親子を救うために、わざわざ私の夢の中へ現れてくれたのです。病室のパイプ椅子にうなだれて力なく泣いている私を助けるために……。なんて頼もしい仲間たちなんでしょう。私は心の中が、希望と勇氣で

満たされてゆくのを感じました。

「うん。みんな、ありがとうね」

「お礼は、あと、あと

」

「そうだよ、夜が明けて、君が現実の世界で目を覚ます前に見つけないといけないんだ」

「よし、分かった」

私はスニーカーの紐をぎゅっと縛りなおすと、立ち上がって言いました。

「じゃあ、みんなで一緒に優希を助け出しに行こう」

「おー！」

「ついでに、いたずら者のパンをいじりはじめてやるー

「れつづーー！」

まあ、冒険の始まりです。

次話へつづく。

優希の夢へと侵入するための入り口は、とんでもない場所にありました。なんと、動物園にいるカバの口の中だつたのです。

「どうして、そんなところから入るのよ!」

私が涙目で抗議すると、マークが羽をぱたぱた動かしながら、おどけた顔で言いました。

「さあね、優希君に訊いてみたら

まあ、にくらしい。

そういうえば去年の夏、優希を連れて動物園へ行つたときのこと、彼があくびをするカバを見て、

「ねえママ、カバさんのお口って大つきいね、すごいね、すごいね」と大はしゃぎしていたのを思い出しました。それいらいカバが大のお気に入りで、よくクレヨンで口のお化けみたいなカバを描いては私に見せてくれます。

「カバさんのお口のなかには、お魚の家族がすんでいるの」

本当に子供の空想というものは奇想天外で、ときには微笑ましく、無味乾燥な日々を送る私たちの心にひとしづくの潤いを与えてくれます。でもだからって、どうして優希と私の夢が、カバの口なんかで繋がっているのでしょうか。マンガみたいに勉強机の引き出しの中でも良いではありませんか……。

「ライオンの口じゃないだけ、まだましゃ」

あたりまえです。

「お、ちょうど上手い具合にカバが水から上がつてゐるぞ、さあ急ごう」

「あん、待つてよー」

今日は休日なのでしょうか、園内は親子連れの客などでかなり賑わっていました。私は、すいすい人ごみをすり抜け飛んでゆく妖精たちを必死になつて追いかけます。なにせ子供の足です、見失わな

いようにするだけで精一杯でした。ときおり知らない人とぶつかりそうになつて「ごめんなさい」と頭を下げます。三頭のカバが暮らすカバ舎の周りは、高さ一メートルほどの手すりでぐるつと囲われていました。妖精たちは、その手すりを難なく飛び越えると、風のような軽やかさでカバのいるあたりを田指してゆくのです。

どうしよう……。

一瞬躊躇しましたが、でも迷つてゐるひまなどありません。それに昔から鉄棒は得意です。私は、いつも、にの、さんで手すりに飛びつくと逆上がりの要領でぐぐつと体を持ち上げました。我ながら、なんてお転婆さんなのでしょう。それでもなんとかよじ上つて手すりを乗り越えると、周りにいた大人たちの間から「おお……」といふどよめきが漏れました。スカートをはいていなくて本当によかつたです。しかし、たちまち飼育係のおじさんに見つかって、大声で怒鳴られました。

「こらつ、きみ、なにをやつてるんだ。危ないから早く戻つてきなさい！」

「あわわわ」

私は大急ぎでカバのいる餌場の方へと走りました。カバ舎の中は、水に浸けた堆肥のようなにおいがしました。コンクリート製の床にはところどころ糞が落ちてゐるので、うつかり踏みつけては大変です。水から上がつたカバは、ちょうど干し草を食べ終えたところで、眠いのでしょうか、さかんにあぐびをしていました。ほんと、大きな口です。下あごの部分から長い牙が突き立つています。あの中へ飛び込むのかと思うとゾッとしてますが、妖精たちはすでにそこを通り抜けて優希の夢の世界へと入り込んだようでした。

「なむなむなむ……」

走りながら、私はむかし死んだおばあちゃんから教わつた禍い除けの呪文を唱えていました。本当はもつとちゃんとした呪文なのですが、頭二文字しか覚えていません。でもなにか困難に直面するたび私はいつもこの呪文を唱え、なんとか乗り切つてきたのです。

高校入試のときも、

「なむなむなむ……」

なんとか合格できましたし、主人の「」両親と初めて対面したとき  
だって、

「なむなむなむ……」

まあ、可愛らしいお嫁さんだこと、と言つて褒めてもらいました。  
優希を出産したときだって、

「なむなむなむ……」

私の不安をよそに、あんなに元氣で可愛い男の子が生まれたので  
す 優希、待つててね。今ママが助けに行くから。

私が駆け寄ると、まるでそれを待つていたかのようにカバが、ぱ  
かーっと大きく口を開きました。間近で見るとすごい迫力です。カ  
バの体重は軽く一トンを超えてるので、まさに怪獣です。なぜこ  
のようなどころへ飛び込まなくてはならないのでしょうか。飛んで火  
に入る夏の虫とはまさにこのこと。いえそれを言つなら虎穴に入ら  
ずんば虎児をえずかもしません。あるいは清水の舞台から飛び降  
りるでしょうか。とにかく私は、心の中で自分自身に問いかけまし  
た。さあ、覚悟はいいかしら ？

いいわけないわよ、ばかあ。

「なむなむなむ、カバさん、どうか私を食べないで……」

ぎゅっと目を閉じ、私は小さな体ごとカバの口の中へ突っ込んで  
ゆきました 。

「やあ

自分の体がカバの口に飲み込まれた瞬間、ふわっと空中に投げ出  
されたような奇妙な浮遊感がありました。どうやら私の体は、カバ  
の胃袋ではなく別の世界へ飛び込んだようです。すぐに視界が暗転  
して周囲の景色が真っ暗になりました。その闇の中を私の体はふわ  
りふわりと漂つてゆくのです。もうどっちが上で、どっちが下だか  
分からぬ状態で、くるくるふわふわ、くるくるふわふわ、まるで  
宇宙遊泳するみたいに……。

しばらくして、なにやら甘い香りがただよつてきました。たぶん粉ミルクの匂いだと思います。そういえば優希は本当にミルクをよく飲む子でした。どんなにグズついても、哺乳瓶を食わせさせることいつもぴたつと泣き止むのです。それを見た母が、私の小さい頃にそつくりだと笑つて笑つていたのを覚えています。甘い香りの次は、どこからか楽しそうなハッピーバースデーの歌が聞こえてきました。おそらくは主人と私の声でしきつ。優希が嬉しそうにふうつと口ウソクの火を吹き消す姿が田に浮かぶようです。それにしても、ここは一体どこのでしよう。優希の思い出の中でしきうか？ そんなことを考えていると、今度はコトコトと野菜を刻む音がしてデミグラスソースの匂いが香つてきました。私の作る料理の中で、優希が一番好きだと笑つてくれたハンバーグの匂いです。ファミリーレストランで食べるハンバーグよりもママの作ったやつの方がずっと美味しい、ですって。まったく褒めているんだが、そりじやないんだか……。

くすつと苦笑いしていると、突然、私の体が重力を取り戻し、がくんと落下する感覚に襲われました。

「きやあ」

と同時に田の前がぱあっと明るくなつて、気がつくと私は公園の砂場の上に投げ出されていました。どうやらお尻から落ちたようですがしごれて動けません。おまけに口の中へ砂が入つたみたいで、舌の上にざらざらした苦みが走ります。

「ペッペッ、ひどいなあ、もう……」

田の奥で星がちかちか瞬いています。腰をさすりながらよつやく体を起こすと、イルルが心配そうに私の顔を覗き込みました。

「……だいじょうぶ？」

「大丈夫なわけないでしょ、もつ、みんなしてどんどん先へ行つちやうんだから」

「「めん」「めん。でもどうやら無事、優希君の夢の世界へ入れたようだよ」

私は立ち上がり、あたりを見渡してみました。どうやら優希を連れてよく遊びに行く近所の公園のようです。実際よりもかなり広く感じるのは、子どもの視点から見ていくせいでしょうか。

「ふーん……、どんなに凄いところかと思つていたら、案外ふつうの世界なのね」

でも通りへ出たとたん、私は仰天してしまいました。だつて建物のほとんどが、なんとブロックで出来ているのです。赤や青や色とりどりのブロックで作られた高層ビルが、まるで美術館のオブジェのようにそびえ立っています。見るからに不安定でヘンテコな形をしています。倒れたりはしないのでしょうか。巨大なブロックのかたまりに押しつぶされる様を想像してゾッとしていると、今度は、これもブロックで作られた三階建てのバスが走つてきました。オモチャ屋さんで、クリスマスプレゼントには何が欲しい? と訊ねたら優希がまよわず指差したものです。運転手はどうやら人形のようで、なんだか運転がぎこちない……と思っていたら、交差点でハンドルを切り損ねてお弁当屋さんの店先に突っ込んでゆきました。がっしゃーん! とんでもない世界です。

私が呆気にとられてぽかんと口を開けていると、シャニースがアゲハチョウの羽を、まるで合わせ貝のようにぴたつと閉じて言いました。

「ね、ちょっと聞いて。葦笛の音がするわ……」

イルルも目を閉じて、耳をそばだてます。

「ほんとだ、あっちの方角から聞こえているよ」

彼が指差す先を見つめ、今度はマークがうなずきました。

「うん、僕にも聞こえる。パンのいる迷いの森はあっちだ

私も、目を閉じて注意深く耳をすましてみました

まず、せわしいクラクションの音、そして街角の雜踏、だれかの話し声……。

ひゅるる、風の音……。

あ……。

聞こえました。私の耳にもはつきりと聞こえるのです。パイオルガンで鳴らしたような美しい音階が……、童心をとらえて離さない楽しげなメロディが……。パンフルート　いたずら者のパンが吹き鳴らす美しい葦笛の音です。

「よし、みんな行こう」

私は、力強くうなずきました。

どうやら口も、いくぶん西の方へ傾いたようです。

次話へつづく。

## HAPPY HALLOWEEN (後書き)

本当はバレンタインデーに完結させる計画だったのですが…… Mボ  
ムセ、じめんなさい！

## A S P I T E F U L BOY

ロックで作られた巨大なお城を三つほど越えてゆくと、急にあたりの景観がひつそりとしあじめました。人通りは絶え、建物も消え、電柱のかわりに太い樺の木がそびえ立つて、湿った土と落葉の匂いが立ちこめています。風が吹くたびに木がざわざわと音を立て、葉のさやぐ音のあいまに、ぴいーつ、ぴいーつ、ききききつという鳥のなく声が聞こえきます。覆いかぶさるように生える木々に邪魔されて、日はうつすらとしか射し込みません。その薄暗い道を、草をかき分けかき分け、私と妖精たちはぐんぐん進んでゆきました。「どうやらパンのいる森は、もうすぐそこみたいね」シャニスが、ひらひら羽を動かしながら言いました。もう耳をそばだてなくても、パンの吹き鳴らす笛の音がはつきり聞こえてくるのです。

ぴるろろりん ぴるろろりん  
きれいな音です。

パンの持つ葦笛は、もともとシユリンクスという名前の水の妖精だったといいます。それを、いたずら者のパンが魔法をかけて笛の姿に変えてしまったのだそうです。だから彼の吹く笛は、楽しげなメロディとは裏腹によく聞くとなんだか物悲しい響きがあります。

ぴるろろりん ぴるろろりん  
「あれ？ 帰り道がなくなつていいよ」  
イルルが後ろを振り返つて言いました。

「あ……」

私も振り向いて、思わず声をあげてしまいました。そうです、今まで歩いてきた道がきれいさっぱり消えているのです。

「どうやらボクたち、もう迷いの森へ入っちゃつたみたいだね」迷いの森……正式な名前はプシュケの森というのだそうです。ここへ来るまでの道すがらマークが教えてくれました。パンが、魔力

を使って他人の夢の中につくり出した森。けつして出口の見つからない森。その森で、迷い込んだ夢の住人は泣きながら出口をさがしつづけ、やがて疲れ果て死んでしまうと言われています。なぜ、そんなひどいことをするのでしょうか。しかもここは優希の夢、私の可愛い天使が見ている、無邪気な夢の中なのです。

「ねえ、みんな。このままだと私たちまで迷子になるんじゃない?」なんだか少し不安になつて私が訊ねると、シャニースがくるんと宙返りしてから言いました。

「だいじょうぶよ、あなたは元々この夢の住人じゃないわ。だから目が覚めると同時に現実世界へと戻つてしまつのよ」

イルルが後をつづけます。

「うん、だから優希君を見つけたらぎゅっと抱きしめて離さないで。その状態で僕らが君のことを目覚めさせてあげるから」

すると、どこから取り出したものか、マークが鋭い針を手に持つてほくそ笑みました。

「そうそう、これで君のお尻をぶすーっとね」「な、なによそれ……?」

「スズメバチの針さ。これで刺されたらもう痛いのなんのつて、あまりの痛さに驚いて目を覚ますことけ合い」

「えー、いやよそんなの」

私は、まだ刺されてもいのに自分のお尻を押さえて身震いしました。あんなもので刺されではたまりません。優希を見つけたら、自分でほっぺたをつねつて目を覚まそうと固く心に決めました。

それから私たちは、どれくらい森の中を歩きつづけたでしょうか。パンの笛はもうすぐ手がどきりとうなくらい近くから聞こえているのに、いつこにうに姿が見当たりません。それどころか私たちは、さつきから同じところをぐるぐる歩き回つているような気がしてならないのです。いつもは陽気な妖精たちも、さすがにげんなりした様子でした。

「あーあ、お腹へつたなあ……」

イルルが飛ぶ氣力を失い、風にへろへろ流れながら言いました。  
「ちよつと休みましょう。」

「ちよつと休みましょう。」

「ちよつと休みましょう。」

「ちよつと休みましょう。」

「あ、そうだ」

私はサロベツトパンツの胸ポケットに、ヨーグルト味のキャンディ

イを入れてあることを思い出しました。

「ちよつと四つあるわ、みなで食べましょう」

「お、いいね」

「だから君つて素敵さ」

妖精たちは乳製品が大好きです。ミルクはもとより、チーズ、バター、アイスクリーム、とくに甘酸っぱいヨーグルトは大のお気に入り。みな嬉しそうに顔をほころばせると、丸いキャンディを両手に持つて、ぺろぺろかりかり食べはじめました。

すると、そのとき

「ほつ、美味そうなもん持つてるじゃねえか」

とつぜん私の背後で、ハスキーな男の子の声がしました。振り向くと、むかし家で飼っていた柴犬くらいの大きさの妖精が、ぺろつと舌なめずりしながらこちらを見ているのです。

パンだわ。

上半身は男の子で、下半身が山羊、頭からは、先っぽがくるんと丸まつた一本の角を生やしています。彼は、ぴょこんと前足を持ち上げて竿立ちになると、そのままちんちんする犬みたいに蹄をそろえて言いました。

「俺様にも一個くれよ」

「あーつ、とうとう見つけたわ。あなたね、優希を連れていったの

は？ さあ、あの子がどこにいるのか教えてちょうだい」

私がやつ問いつめても、彼は平気な顔でうそぶきます。

「ああ、そんなやつ知らねえな」

すると一番氣の強いシャニスがやつて来て、腰に手を当てふんと息巻きながら言いました。

「やつやつて悪さばかりするから、いつまでたつても嫌われ者な

よ。こくら友だちがいなくて退屈だからつて、森の中へ子どもを引

つぱり込むのはもう止めなさい」

「つるせこ、つるせこ。ここは俺様の森だぞ、気に食わないことが

あるんだつたらせつやと出でいけ」

パンは怒つて、どこからか大きなハエタタキを取り出すと、それ

をぶんぶん振り回しあじめました。

「あやーっ

「あぶない」

シャニスをかばおうとして、マークとイルルが彼女の前へ飛び出

します。マークは、ぱちん！ ほっぺたを叩かれて、へろへろぼつ

とんと地面に落つこちました。イルルも、ぺちん！ お尻を叩かれ

て、えんえんとべそをかいています。私は、あわてて言いました。

「ちょっと乱暴はよして」

そしてキャンディをパンの前にわし出しました。

「これをあげるわ。だから優希のこと返して、お願ひ」

でも彼は、それをぽいつと口の中へ放り込むと、がりがり噉み砕きながら言つのです。

「うん、美味しい美味しい。でもこれっぽつちじやダメだな。もつと美味いもんこつぱいよこしな。そうしないとあのチビの居場所は教えてやらなさいぞ」

私は思わずむかーつときて、腕を振り上げそうになりましたが、でもここで彼とケンカするのは得策ではありません。どこかへ逃げ込まれでもしては、また探し出すのに骨が折れるし、それに彼は強力な魔法を使うと聞いています。うつかりその魔法で力エルやブタ

の姿に変えられてはたまりません。かといって私はもう食べ物を持つていませんし、さてさてどうしたものか……。

途方にくれて、何気なくポケットに手を入れた瞬間、私はあるイタズラを思いつきました。とっても悪いイタズラ……。でもイタズラ好きのパンをこじりしめるには、これくらいがちょうどいいかもしれません。

「ねえ聞いて、私もう食べ物は持っていないんだけど、その代わりこれがあなたにあげるわ」

そう言つて、虫めがねを出した。おばあちゃんが針に糸を通すときなどによく使つていたもので、フレームがぴかぴかのステンレスで造られたかなり立派なやつです。パンは、その虫めがねを受け取ると、怪訝そうな顔つきで眺め回しました。

「なんだこりや？ いつたい何に使うもんだい？」

「その透明なレンズの部分を通して、色々なものを眺めてこりんなさいな」

私が言つと、彼はその虫めがねを使って色々なものを覗き込み、そして「うおうー」とか「すげえ！」とか驚嘆の声を漏らしました。「こいつはすげえや！ 小さいものがなんでも巨大に見えちまう。ふむふむ、アリンコつてのはこいついう顔をしていやがつたんだな」しめしめ、どうやら彼は虫めがねが気に入ったようです。そこで私は言いました。

「ねえ知つてる？ それを使つとね、とってもきれいなものが見られるのよ」

「ほう、そりゃこいつたい何だい？」

私は、空をびしょと指差して言いました。

「お日様よ」

「へー」

「その虫めがねでお日様を見てこりんなさい。まるで万華鏡を覗き込んだときのように太陽光線が七色に渦巻いて、すつじくきれいなんだから」

「そりやすげえな、よーし、どれどれ……」

彼は、木漏れ日の射し込んでいるあたりへ移動すると、夏空からぎんぎんに照りつける太陽を虫めがねごしに見上げました。とたんに悲鳴をあげて地面を転げ回ります。

「ひーっ、ひーっ、目が痛い、目が痛いよー」

そうです、虫めがねは凸レンズなので光を一点に集めてしまうのです。だから太陽なんか見たりしては大変、目を火傷してしまうのです。

「痛いよー、たすけてー」

泣き叫ぶパンを、えいと取り押さえて私は言いました。

「悪いことばかりしているから、こうこう目に遭うのよ。これからはもう、森へ子どもを誘い込んだりするのは止めなさい。いいわね？」

「ひーっ、分かつたよ、約束する。だからたすけてー」

「よーし、ぜつたい約束だからね」

そう念を押してから、私はレースのハンカチを取り出し、彼に訊きました。

「いま田を冷やしてあげるわ。この近くに小川の流れているところはない？」

「そ、そこの竹籠が生い茂つてゐあたりの奥に、泉がわいてゐるはずさ」

「うん、分かつた」

私はシャニースにハンカチを濡らしてくるよう頼むと、もう一度パンを問いただしました。

「で、優希はどこにいるの？」

すると今度は、泉とは反対の方角を指差して言いました。

「この先をずつと歩いてゆくと、ばかでつかい栗の木があるんだ。あのガキは、さつきまでそのあたりをウロチョロしていたぜ」

私はパンを妖精たちに預けて、言われた方角へと駆け出しました。

優希、待つててね、今行くから。

次話へつづく。

A  
S P I T E F U L   B O Y (後書き)

次回、最終話。『ひつじ』期待！

パンの言っていた栗の木は、すぐに見つけることができました。だつて本当に大きいんですもの。幹の太さなんて、ゆうにドラム缶三本分くらいはあるでしょうか。古くて、威厳があって、そして大地にじっしりと根を下ろした立派な木です。その太い幹からは、まるで巨大な日傘のように枝葉がひろがつて空を覆いかくしていました。夏なのに、木陰に入るとなんだかひんやりとします。ツタの絡まつた根元にはリスが一匹いて、がじがじと木の実を食べていましたが、私が近づいてゆくと驚いたように立ち上がり、ちょいちょいちょいと幹の高いところまで駆け上つてゆきました。

「ゆうきー、ゆうきー、どこにいるのー？」

私は、その栗の木から半径百メートルくらいまでを、くまなく探し廻りました。でも、どこにも優希の姿は見当たりません。どうしたのでしょう。もうこの辺りにはいないのでしょうか。どこか別の場所を当てもなくさまよっているのでしょうか。ママ、ママ、と私のことを呼びながら泣いているのでしょうか。もう太陽は、西の空とその下にひろがる稜線の境田くらいまで下りてしまっています。あと一時間もしたら日没がはじまるでしょう。いったい私は、どうすれば……。

途方にくれながらふらふら歩いていると、例の栗の木に大きなウロが空いているのを発見しました。人ひとりがすっぽり入れるくらいの大きさです。まさかと思い中を覗いてみると……いました！ 優希です。びつしりと敷き詰められた枯葉の上でころんと丸くなつて、すやすや寝息を立てているのです。なにか楽しい夢でも見ているのでしょうか、ときどきにこつと笑顔になつたりします。ああ、なんて可愛らしい寝顔でしょう。ほんとうに天使のよう……。

「こんなところにいたのね。優希つば、起きてよ！」

私がその小さな肩をつかんでゆり起こすと、彼は既に目をこすり

ながら頭をもたげました。

「……うーん、おねえさん、だあれ？」

まだ半分夢の中こいのでしょ、頭がふらんふらん揺れ動いています。

「あなたを迎えてきたのよ、さあ私と一緒に帰りましょ、」

「……ここの木のにおいがしてとっても気持ちいいの。もひひょつと寝かせて」

今にもぐくつさうな臉を一生懸命持ち上げて、そんなことを言うのです。まつたくしじうがない子。私は苦笑しながら言いました。

「今夜の晩ご飯は、優希の大好きなハンバーグよ」

「はんばーぐ……」

眠気と食欲を秤にかけて、どうやら食欲のほうを選んだようです。彼は「じぞじぞ」とウロの中から這い出てきました。その小さな体をつかまえて、私はぎゅっときつく抱きしめました。

「もう、心配ばっかりかけて、本当に悪い子なんだからあ……」

今まで必死にこらえていた心細さや、よつやく優希を見つけたことへの安堵からか、涙がぽろぽろと溢れ出すのを止められません。無事でよかったです。もう一度と会えないかもなんて思つてしまつた。胸いっぱいに我が子のにおいを吸い込んで、その存在をひしひしと確かめます。良いにおい……、ママだけにしか分からない、この子のにおい。そつと目を開じて、いまこの瞬間がもたらしてくれる幸福をじつくり噛みしめます。そんな様子を彼は不思議そうに見ていますが、やがて私の胸に顔をうずめると、再びすやすと寝息を立てはじめました……。

そのときです。こつん、ふいに何か硬いものが私の頭にぶつかりました。なんだらううと思い草の上に転がったそれを拾い上げると、あめ玉でした。なぜこんなところに？ 不審に思い、そつと頭上を見上げてみると……。

「え、なによこれ？」

ビスケット、キャンディー、ショークリーム、ゼリー、ゼーブーンズ、マ

シコマロ……、頭上に大きく張り出した栗の木の枝という枝に、まるでクリスマスツリーの飾りつけみたいにたくさんのお菓子がぶら下がっているではありませんか。みんな優希の大好きなものばかり。なんてことでしょう。うふふ、私は涙をぬぐいながら、こみ上げてくる可笑しさに目を細めました。そうです。ここは悪い妖精のつくり出した森である以前に、優希といつ想像力豊かな少年が見ている夢の中なのです。無邪氣で、食いしん坊で、ときどき変な勘違いをやらかしては私のことを笑わせてくれる、そんな可愛い息子が見ている夢……。なんて純粋で、なんて優くて、そしてなんて愛らしいんでしょう。彼がやがて大人になったとき……ちゃんと自分の歩むべき道を見つけて私の元から巣立つてゆくときに、もう一度今日ここであつたことを話して聞かせることにしましょう。そしてあなたには、こんなに素敵な魔法を使う力があつたのよつて教えてあげることにしましょう。そう心に決めて、私はもう一度、彼のことを思いつ切り抱きしめました。

まさにその瞬間です。

「いまだ！　えいつ

「ひつ」

とつぜん、私のお尻に強烈な痛みが走りました。あまりの痛さに体中からぶわっと汗がふき出します。涙もこみ上げてきます。びっくりして後ろを振り返ると、マークが、きししこと笑っていました。イルルもちょっと困った顔で笑っています。シャニースが手を打つて一回宙返りをしました。

まさか……私は、おそるおそる自分のお尻へ目を向けました。ああ、やっぱり！　ズズメバチの針です。マークが私に見せびらかしていたあの恐ろしいズズメバチの針が、深々と私のお尻に突き立つてしているのです。

「痛あーいっ、あんたたちつてば何てことすんのよ！」

そうです。彼らはじっと物陰にかくれながら私たち親子の様子をうかがい、この瞬間がやつて来るのを今か、今かと待ち構えていた

のです。

「これで元の世界に帰れるよー」

「バイバーイ、また遊ぼうねー」

「今まで私は泣きながらお尻をさすっていました。ちよつと堪え難いような痛みです。はつきり言って死にそうです。去年、虫歯の治療をしたときより十倍くらい痛いです。きっと彼らは、私のお尻に針を刺すことをはじめから計画し、ずっと楽しみにしていたのでしょうか。やはり妖精という生き物は、みんないたずらが大好きだったようです。

「もう、最悪うーつー！」

がばつと身をおこすと、そこは病室の中でした。パイプ椅子が、ぎしぎし音を立てています。どうやら夜は明けたようで、閉じられたカーテンのすき間からやわらかな日差しがすーっと斜めに射し込んでいました。

まず私の目に飛び込んできたのは、優希の顔でした。心配そうな表情で、じつとこちらを見つめているのです。

「……優希？」

「あ、ママ、やつと起きた」

私は慌てて腰を浮かせると、急いで彼のベッドへ歩み寄りました。

「あなた、もう熱はないの？ 苦しくない？」

「うん、だいじょうぶだよ」

そつと額に手を当ててみます。どうやら熱はすっかり引いたようでした。

「ああ、よかつた……。一時はどうなることか？」

私は、パジャマの上から彼の小さな肩を抱きしめました。救急車に乗つてここへ来たときには、もうどうして良いのやら分からず、ただ涙ぐみながら神様にお祈りしていましたが、もう大丈夫のよう

です。きっと神様が私の願いを聞きとどけて下さったのでしょうか。  
さあ、先生に診ていただいたら一緒に我が家へ帰りましょう。ちゃんと治つたら、優希の好きなもの何でも食べさせてあげるからね。  
私は、息子の頭を優しくなでながら、汗ばんだおでこにそつと口づけしました。

と、そのとき、私は彼のやわらかな髪に黄色いパンくずのようなものが付いているのを発見しました。

「なにかしら？」

そつと指でつまんで見ると、どうやら落ち葉のかけらのようです。ベッドで寝ていたはずの優希の髪に、なぜ落ち葉なんか付いているのでしょうか？

不思議に思つて首をかしげていると、彼が遠慮がちに私を見上げて言いました。

「あのね、ママ……」

「え、なあに？」

私は考えるのを止め、ベッドにひたと腰を下ろすと覗き込むようにして優希と目線を合わせました。

「うん？」

すると彼はこくり笑つて、いきなりグーで握つた右手を突き出すのです。

「はい、これ

「え？」

驚いている私の鼻先で、彼はゆっくりとその小さな手を開いて見せました。そこには、なんと銀紙に包まれた一粒のチョコレートが乗つていたのです。

「だつて、きょうは、られんたいんでしょ？」

彼は微笑みながら言いました。

「あのね、ぼくね、ママのこと、とっても好きなの。だからね、ママにビッグしてもチョコあげたいなって思つたの」

「……」

私は今、いつたいたいどんな表情をしているでしょう。驚きと、喜びと、照れくささと、愛しさがじゅぎゅになつた、とっても変な顔をしているに違ひありません。

「えーん、なんて可愛いやつなんだ、お前は…」

私はもう一度、優希のことを思いつきり抱きしめました。そして頬っぺたにぶちゅーっとキスをします。彼は驚いて「やー」と言いながら身をよじつていましたが、しかしそくに私を見て「こんな」とを言いました。

「あのね、ぼくがチヨコニーになつて思つてたら、へんな妖精さんが現れて、お菓子の木のあるところまで連れてつてくれたんだよ」

あ！

その話を聞いた瞬間、いつも田舎めると同時に忘れてしまう妖精たちとの記憶が、まるで閃光のよつて頭の中をフワツシユバックしました。

やんちゃ坊主のマーク。

顔にそばかすのあるイルル。

お洒落で気の強いシャニース……。

そうです、今こつして優希をこの腕に抱きしめることができるのは、すべて彼らのおかげなのです。無力な私のために夢の世界を案内してくれて、悪く妖精とも一緒になつて戦ってくれた、素敵な仲間たち……。なのに私は、彼らにお礼を言つひとすら忘れていました。なんてことでしょう。こんど会つたら必ず今日のお礼を言わなくちゃ。「みんな君たちのおかげだよ、ありがとー」と言つて、またヨーグルト味のキャンディを駆走してあげなくちゃ。ぜつたいに、ぜつたいに……。

感動でじわーっと涙ぐんでいると、ふいに優希が口を開きました。

「そうだ、ママ、きいて。あのね、ぼくが森のなかで寝てたらね」

「…………え？」

「知らないおねえさんがきて、ぼくのこと起じしてくれたんだよ

「……」

私は思わず苦笑してしまいました。そのおねえさんっていうのは、じつはママだつたんだよ、なんて口が裂けても言えません。だって恥ずかしいじゃないですか。自分の少女時代の姿を、息子に見られただなんて。

でも、ふと考えてしまつのです。もし私が、子どものころに優希と出会つていたなら、ふつうの男の子と女の子として知り合つていなら、彼は私のことをどう思つたでしよう？ もしかして、恋心を抱いたりなんかしたのでしょうか？

ちょっと探りを入れてみました。

「ねえ、優希……。そのおねえさんって、可愛いかった？」  
すると彼は、人差し指を口にあて「んーとね、んーとね……」と  
考え込んでいましたが、やがてにこっと笑いながら言いました。  
「日に焼けて、まつ黒だつた」

……まだ、お世辞を言える年頃ではありません。

その年の夏、私は実家で法事をすませるため、久しぶりに父母の暮らす田舎町の一軒家を訪れました。そこには懐かしい場所があります。そうです、幼いころ妖精たちと戯れていたあの庭です。園芸好きの父がよく手入れをしているせいで、花壇に咲きこぼれる季節の草花は、今もあの頃のままの瑞々しい姿をたもっていました。でも庭からの眺めはすっかり変わつてしまつたようです。トウモロコシ畑は自動車学校の教習コースになつていて、アシの生い茂る原っぱやオタマジャクシの小川も、今ではホームセンター やスーパー マーケットの建ちならぶショッピングモールへと姿を変えていました。

妖精たちは、あれから私の夢には現れませんでした。ぜひとも、ひとことお礼が言いたかつたのですが、どうやらその願いは叶わぬようです。優希は、今でも彼らと遊んでいるのでしょうか。訊ねてみても、うふふつと笑い、「それは、ぼくたちだけの秘密なの」

と言つて教えてくれないのです。

夏の日差しが、庭に咲きこぼれるヒマワリの花びらを鮮やかなオレンジ色に輝かせていました。

私は、ふと思いついて、コンビニで買つてきたヨーグルト味のキヤンティを小皿に盛り、それを庭のかたすみにそっと置いてみした。我ながらバカなことをするものです。妖精たちは、もうここにはいないのに……。

でも翌朝見ると、小皿の中身は、きれこわつぱりなくなつていていました。

終わり。

お読みください、ありがとうございました。

今回はMポムさん母子の可憐なイメージを表現するために、ちよつと児童文学っぽくしてみました。もし本物のMポムさんにお会いしてみたいという方いらっしゃいましたら、ぜひ下記リンクより彼女のブログページ『あいまいみつぐす』の方へお立ち寄りくださいませ。キューでロケティッシュな、Mポムさんオリジナルのイラスト（パンチラ有り！）もたくさんアップされてますよ～（^\_^-）  
でわでわ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6797j/>

---

られんたいんの妖精

2010年10月8日15時24分発行